付録５ 論文の書き方に関する参考図書一覧

■ 『これから論文を書く若者のために』酒井聡樹著　共立出版　2002：本館学閲・北分
著者は東北大学生命科学研究科の教員です。なぜ論文を書くのか、論文には何が求められているのかを中心に、サッカーの例などあげて親しみ易く書かれています。付録として、「論文の審査過程」があり、投稿してから実際にアクセプト（論文受理）されるまでを詳細に記述してあります。読むと早速「論文」を書きたくなるような本です。

■ 『改訂　化学のレポートと論文の書き方』小川雅弥監修代表　化学同人 1999：本館学閲・北分
140 ページほどでハンディでありながら、内容はレポート、論文作成に必要な事柄を、豊富な実例や図を使用して詳細に記述してあります。初心者向けということで、まず化学に関する文章を書く上で必須の「化学式」「図表」の書き方などについてコンパクトに説明があり、その後「日本語文」「科学文」に必要な事項へと説明が移ります。卒業論文、雑誌論文の作成などがメインですが、講演会での発表や、ポスター発表の仕方についても具体的な説明があります。

■ 『実験・情報の基礎（実験化学講座 1．基礎編 1)』第５版　日本化学会編 2003：工分・北分　ほか
全 30 巻のシリーズですが、うち冒頭の 4 巻を「基礎編」として、実験のみにこだわらず、化学を学ぶ上で必要な事柄を解説しています。第 1 巻にあたる本書は、「化学情報の発信」として、実験ノートのまとめ方から、論文作成のノウハウまで 50 ページほど費やして説明しています。論文作成については、英語に翻訳する場合の注意事項を、例文を使用してポイントを細かく解説しています。また、ポスター発表の仕方や、資料作成（PowerPoint の使い方まで）についてもきめ細かな記述があります。

■ 『Judy 先生の英語科学論文の書き方』　野口ジュディー；松浦克美著　講談社サイエンティフィク　2000：本館学閲
本書のカバーには「英語で発信しなければだれもあなたの研究を振り向いてくれません」と書かれているとおり、とにかく英語でひととおりの科学論文が書けるようになることを目的としています。対象とする読者は初めて英語で論文

を書く大学院生で、国際的な学術雑誌に投稿する原著論文を想定しています。実例を豊富にあげ、附属した CD-ROM にも論文のひな型や、重要単語のリスト、例文集などを収録しています。

■ 『120 パーセント科学英語：早く手軽にマスターするコツ』小山昭弥ほか監修 化学同人　1994：本館学閲・工分　ほか
他の本に比べ発行年が少し古いですが、現在までに 10 刷を数え、よく読まれていることがわかります。やはり英語で書くことについて徹底的に解説した本ですが、ポイントを問題形式にし実際に手を動かして学ぶことのできるテキストを目指しています。また、米国化学会発行の「ACS Style Guide」の主要事項も問題形式にアレンジし、科学英語の決まり事が身に付くよう工夫してあります。研究者から集めた「英語にまつわる体験談・失敗談」のコラムも 30 近くあり、楽しく読めます。

■ 『「超」文章法：伝えたいことをどう書くか』野口悠紀雄　中公新書　2002：本館学閲
まず著者は、企画書、評論、論文などの論述文の目的は、メッセージを確実に伝え、読み手を説得するものであると認識し、「ためになり、面白い」メッセージでなければならないと主張しています。また、読み手に興味をもってもらうためのプロットや構成上の工夫が大事であると述べます。さらに、説得力を強めるための比喩や引用の手法、分かりやすい文章とするための技術についても言及しています。「ためになり、面白い文章を書くべき」という点が類書にないところで新鮮です。

■ 『図で考える人は仕事ができる』久恒啓一　日本経済新聞社　2002：本館学閲
著者は、図解表現の技術を、思考力と発想力を鍛えるものであり、主張を伝達するのに文章よりも効果的な方法であると述べています。論文を作成する上でも、一度図解をすることで論旨が明確になり、さらに新たな発想が生まれるという点が非常に参考になります。また、文章だけではなく、図解を視覚的な説明として活用することも有益ではないでしょうか。本書での図解の多用は、この著者の影響によるところが大きいのです。